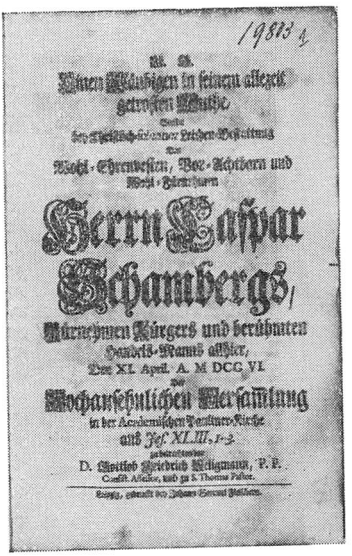
カスパル・シャムベルゲルの「弔辞」について

ヴォルフガング・ミヒェル

ドイツのライプツィヒ出身で、カスパル流外科の元祖、カスパル・シャムベルゲル（一六二三―一七〇六年）の生涯については(1)これまでにも色々と紹介してきたが、研究を進めるうちに、彼の葬儀に際しての「弔辞」等、新しい資料を発見した。

Einen Gläubigen in seinem allezeit getrosten Muthe, Stellte bei Christlich=solenner Leichen-Bestattung Des Wohl=Ehrenvesten, Vor=Achtbarn und Wohl=Fürnehmen Herrn Caspar Schambergs, Fürnehmen Bürgers und berühmten Handels=Manns allhier, Den XI. April. A. MDCCVI. Der Hochansehnlichen Versammlung in der Academischen Paulinder=Kirche aus Jes. XLIII, 1–3. zu betrachten dar D. Gottlob Friedrich Seligmann, P.P. Consist. Assessor, und zu S. Thomas Pastor. Leipzig, gedruckt bey Johann Samuel Fleischern.(1)

このような特に重要な人物の場合にのみ印刷された弔辞は、ライプツィヒ市民社会に於けるシャムベルゲルの地位の高さを明確に示している。記念のために配られる部数の少ない弔辞は殆どが時代と共に消えていく。


19803 1

Einen Gläubigen in seinem allezeit getrosten Muthe

Stellte bei Christlich-solenner Leichen-Bestattung des Wohl-Ehrenvesten, Vor-Achtbarn und Wohl-Fürnehmen

Herrn Caspar Schambergs,

Fürnehmen Bürgers und berühmten Handels-Manns allhier,

Den XI. April. A. M DCC VI.

der Hochansehnlichen Versammlung in der Academischen Paulinar-Kirche aus Jes. XLIII. 1-3

zu betrachten

D. Gottlob Friedrich Seligmann, P. P.

Consist. Assessor, und zu S. Thomas Pastor.

Gedruckt bey Johann Samuel Fleischern.

図1　弔辞の第1面（Stolberg-Stolberg の弔辞集，19803号より）

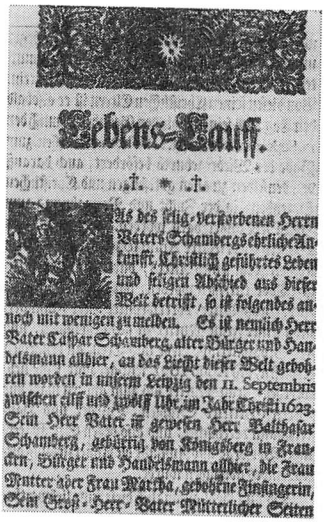
シャムベルゲルの弔辞の場合も今日ではドイツ、ヴォルフェンビュッテルのヘルツォーク・アウグスト図書館に保存されている「シュトルベルク・シュトルベルグの弔辞集」の一編しか残っていないようである。

シャムベルゲルに関する資料は数部に分けられる。冒頭はゼーリヒマン神父の六十六頁にも及ぶ説教で、これは、普通の早さで読み上げても二時間半前後はかかったと思われる。聖書から多くを引用し、遺族や悲しみにくれる人達を慰めている。死出の旅に出たシャムベルゲルが若い頃二万マイルを超える東インドへの旅をしたことについては幾度となく触れられており、二度の難破を生き延びたのは彼が神に限りなく信頼を寄せていたからであり、また同時に神のシャムベルゲルへの寛大な慈悲の顕われであるとしている。さらに神父は十六頁にわたる「履歴」の中で、葬儀の出席者に色々と気を配りながら故人の生涯、業績などを紹介して

いる。短い「しめくくり」と「主の祈り」で弔辞は終わる。その後には六頁の「謝辞」が続くが、これは「黒い葬儀の大広間」で述べられ、ヨーハン・ゴットロープ・プファイフェル（Johann Gottlob Pfeiffer）によるものであった。

また、ヨーハン・ヴィルヘルム・クリューゲル（Johann Wilhelm Krüger）が出版した以下の九人の「後援者、親族と友人」による「最後の名誉の追憶」も興味深いものである—ヨーハン・ツュプリアーヌス（Johann Cyprianus）、クリストフ・シュライテル（Christoph Schreiter）、ヨーハン・クリストフ・シャッヘル（Johann Christoph Schacher）、ゴットリープ・シェア（Gottlieb Schaer）、ヨーハネス・ドルンフェルト（Johannes Dornfeld）、ザンクト・トーマス教会の助祭イマーヌエル・ホルン（Immanuel Horn）、ロマーヌス・テレル（Romanus Teller）、クリスティアン・エーレンフリート・ザイフェルト（Christian Ehrenfried Seyfert）、ヨーハン・グラウプネル（Johann Graupner）、そしてクリスティアン・ヤーコプ・ザイレル（Christian Jacob Seyler）。

さらにクリスティアン・ゲツェン（Christian Gözen）が出版した三頁には、ゴットフリート・オレアーリウス教授（Gottfried Olearius）による「即興の追悼詩」がみられる。シャムベルゲルのいとこヨーハン・シュテファン・フリッツ（Johann Stephan Vlitz）も自分の「感想」の印刷をヨーハン・アンドレーアス・チャウ（Johann Andreas Zschau）に依頼している。文集の最後には孫のカスパル・フリードリヒ（Caspar Friedrich）とクリスティアン・ゴットフリート（Christian Gottfried）が流した「悲しみの涙」で綴った三頁が残っている。


Lebens-Lauff.

†. ✱. †.

Als des selig-verstorbenen Herrn Vaters Schamberges ehrliche Ankunft, Christlich geführtes Leben und seliger Abschied aus dieser Welt betrifft, so ist folgendes anzuführen und wenigen zu melden. Es ist nemlich Herr Vater Caspar Schamberg, alter Bürger und Handelsmann allhier, an das Licht dieser Welt gebohren worden in unserm Leipzig den 11. Septembris zwischen eilff und zwölff Uhr, im Jahre Christi 1623. Sein Herr Vater ist gewesen Herr Balthasar Schamberg, gebürtig von Königsberg in Franken, Bürger und Handelsmann allhier, die Frau Mutter aber Frau Martha, geborne Jungingerin, Sein Groß-Herr-Vater Mütterlicher Seits

図 2　シャムベルゲルの「履歴」（Stolberg-Stolberg の弔辞集 19803 号より）

ゼーリヒマン神父が書いたと思われる短い「履歴」（図2）は特に貴重な参考資料であり、ドイツ語の本文はすでに発表した。[11] ここでは、若いシャムベルゲルの職業養成や東インド商会での彼の活動に関する不明な点について紹介し、これまで知られている経歴を補いたいと思う。

私見ではあるが、以前からシャムベルゲルは大学出身の医師ではなく、理髪外科医だったと主張してきたが、このことは以下の文でようやく証明される。

「当初彼の愛すべき両親は、息子の成長期に彼を商業へ向かわせようとしたが、当時ドイツは戦時不安で、この職業を子供に選ばせるのは賢明ではないと判断し、むしろ特に当時著名な医師だったミヒェリスの外科学を修めさせるようにという忠告に神を信

じて従い、結局一六三七年三月十六日、息子を当地の経験豊かな外科医クリストフ・バッヘルトに託した。そこで三年間、この学問の基礎をよく学び、一六四〇年、恩師に別れを告げたときには名声と栄誉を得るほどになっていたが、自分の腕をさらに磨くため、彼はまもなくハレとナウムブルクへ行き、さらに丸二年この学問に没頭した。[四]

クリストフ・バッヘルト（Christoph Bachert）については残念ながら何もわかっていない。

ヴェストファーレン、ゾーストのヨーハン・ミヒャエリス（Johan Michaelis）[五]はヴィッテンベルクを初めとして、ドイツ、オランダの大学で学業を修め、一六三〇年ライプツィヒで修士、一六三一年に博士号を取得し、まもなく教授になっている。その経歴のうち、「終身学の部長」（Decanus perpetuus）になったことや、一六四一年からはヴィルヘルム・フォン・アルテンブルク公爵の侍医になり、一六六二年からはヨーハン・ゲオルク二世選帝侯の侍医を勤めたこと等が注目に値する。彼はライプツィヒで初めて化学薬を紹介し、自らも調合薬を多数開発したが、その中でも「Specificum cephalicum」[六]は大いに用いられたようである。また、重要な著作を再版し、前書きも多数書いている。ミヒャエリスは一六六七年に死去した。彼の著作全集はニュルンベルクで一六八八年に出版され、一六九八年に再版された。一六三七年シャムベルゲルの両親に外科医としての養成を勧めたとき、彼は三十歳代の初めですでに正教授になっていた。

見習を終えた外科医がライプツィヒで資格を取るためには二年間勤めれば十分で、修業の旅に出る必要もなかったようである。しかし、十六歳のシャムベルゲルは「愛する家族の承認と同意を得て」、三十年戦争のさ中で身に危険の及ぶことも多かったが、旅に出た。まず、ハレとナウムブルグで二年間、腕に磨きをかけた。「履歴」にはさらにハンブルク、リューベック、プロイセンのケーニヒスベルク、ダンツィヒ、スウェーデン、デンマーク、そして最後にオランダが並ぶ。[七]

東インド行きの動機や決心について、ゼーリヒマン神父は「神のお導き」と職業への熱意を挙げる。故人を賛える他のテキストもこの点に妙にこだわり、シャムベルゲルがライプツィヒのよき市民として何十年も共に生活してきたにもかかわらず人々の多くは、彼がどうしてこれほどまで旅行を広げたのか、理解に苦しんでいた。シャムベルゲルはアムステルダムの商会所に応募しているが、[八]私がすでに記したように外科医には厳しい試験を課していた。[九]

彼は三年間の期限付きで、外科医長一人と外科医二人と共に旗艦「マウリーツィウス号」（Mauritius）[一〇]に乗船した。艦隊は一六四三年十月二十四日に出港した。おそらく彼はいわゆる「三番目の外科医」だったと思われる。外科医たちは士官と一緒に食事を取り、乗組員よりはいくらかよい寝床が与えられていた。彼らは病人の世話と一定の衛生上の消毒、つまり火薬への点火、及び船長室で酢を気化させたりしていた。ヨーロッパから東南アジアまでの長い航海では死亡率も極めて高かった。船出してまもなく新鮮な食料品と飲料水が不足し、船は通気が悪く、乗組員の体調は

日々に悪化していたに違いない。南緯度地方の様々な伝染病に対して、陸上ではこのような病気の治療を禁止されていた外科医はいずれにしても何もできなかった。往路では喜望峰に補給基地がまだなく、ここで水の十分な補給ができたかどうかもわからない。喜望峰から出て、シャムベルゲルは二度、嵐に遭い、「船を失い、野蛮な住民のために生命の危険に」さらされた。オランダの記録によればマウリツィウス号は一六四四年二月七日レーウヴェンベルヒ島の付近で座礁し、沈没したが、積み荷も乗組員も伴走のフレーデ号とテーゲル号に助けられた。この航海は長く続き、ついに「船上での危険な反乱」が起こったが、それは挫折したか、あるいは鎮圧されたかのどちらかである。「新鮮な水が不足し、他にも面倒が多くて」赤道付近で彼は二度も重い熱病にかかり、床に伏した。九ヶ月たってやっとシャムベルゲルは一六四四年七月三十一日、「運良く無事に」東インド商会帝国の中心地バタビアの地におり立った。彼の頑丈な体質はこの航海で初めて証明された。彼はゆっくりもしていられなかった。直ちに戦艦に乗船しなければならなかった。商会はちょうどポルトガル人に対する九度目の海上封鎖を準備していた。司令官は後ほどバタビア総督として偉大な業績を挙げたヤン・マーツイケル（Jaen Maetsuycker）。艦隊のうちの一隻にライプツィヒの同郷人ヨーハン・フォン・デル・ベール（Johann von der Behr）が同船しており、彼がこの作戦を詳細に記している。シャムベルゲルは軍に配属されて四日後の一六四四年八月八日、乗船した。十日に艦隊は出港し、八月二十八日にゴアの沖合に着いた。運がよくマーツイケルは彼の目的を交渉のみによって達成した。[一三]

シャムベルゲルの履歴書によれば次の滞在地はセイロン島になっている。ゴア近郊での交渉を成功させた後、十一月半ばに艦隊の大部分は西海岸のネゴンボに向かった。[一四] ここはポルトガル人が一月四日、東インド商会に明け渡していた。さらにそこからスラタへペルシアへ向かった。[一五] ペルシア湾、ホルムズの沖合でクラース・コルネリス・ブロック（Claes Cornelisz Blocq）の下、船員五〇七名と兵士四五二名を擁する大艦隊が集結した。しかし、様々な攻撃や交渉にもかかわらず、ガムロンとキスミスではそれほどの成果は挙げられなかった。シャムベルゲルが記した地名から推測すれば、彼はシェルフィス号（Schelvis）に乗り込んでいたようだ。[一六] ペルシアでの冒険は一六四五年八月半ばに中断された。シャムベルゲルの船はモルッカ諸島のテルナテ島に向かい、一六四六年一月五日、再びバビタビアへ帰った。[一七] 次の作戦までの間を彼はおそらく町の病院か要塞の医局で過ごしたのであろう。

一六四六年八月二十三日、シャムベルゲルは「フォルモーサ島、中国や日本の王国」へ旅立つよう命令を受けた。つまり彼には勤務期間の延長が課せられたことになる。中国への旅に関しても詳細がわからない。ゼーリヒマン神父が述べた旅行先の順番は中国に関しては狂っている可能性が大きい。一六四四年に明朝が崩壊してから中国南部では明朝の支持者が清軍に対してかなりの抵抗を続けていた。台湾のオランダ商館と明朝の関係が次第に悪化していくなかで、中国との貿易を安定させるため北京の新しい政権と関係を結ぶ必要性がますます高まったのである。そこで商会は

調査をかねた使節としてフレデリック・スヘーデル（一六五二年）やツァハリアス・ワーゲネル（一六五三年）を広東へ派遣した。もしかしたらシャムベルゲルはどちらかの使節団の団員だったかも知れない。

シャムベルゲルの日本滞在はよく研究されている。ここでは「履歴」の記述を紹介するに留めよう。

「八月二十三日に新たな命令を受け、東インド商会の大使節団とともに台湾島、中国、日本へ行き、最後には江戸にも行くようにと言われたとき、彼はこの命令に従順に従い、すぐに乗船したばかりか、最終目的地で四名の日本人医師に技術を試され、彼の外科医学が確かなものであるとみなされるや、その医術によって日本の皇帝の宮廷や高位の君主や貴族にいろいろな病気に対する助言を求められるという名誉を得た。しばしば順調に治療が成功したおかげで多くの特権や自由を得、東インド商会全体も優遇された。ついにはその地に長く滞在せざるを得なくなった。彼はついには辞めて元のヨーロッパの会社に戻りたいと切望し、許可を得たが、翌年新たな商館長と共に再び日本の幕府に招かれた。」(一八)

この記述によると、彼はアンドリース・フリージウスではなく、次期の出島商館長アントニオ・ファン・ブルックホルストとともに来たことになる。ブルックホルストのフロイト船マースランド号は台湾を経由して日本に来ており、一六四九年八月七日に長崎港に入っている。四人の日本人医師による「検査」のエピソードは商館長ブルックホルストの日記にも一六四九年十一月七日付けで記されている。それによれば、通詞猪股伝兵衛と中村八左衛門が剃髪した人四名を同伴して商館にやってきた。奉行馬場三郎左衛門からこの四名に外科の教授を依頼されていたのである。彼らは外科医、つまりシャムベルゲルに紹介された。(一九) 有名な江戸での十ヵ月に及ぶ滞在は、シャムベルゲルにとってかなり長引いていたようである。

日本を後にして一六五五年までの四年間シャルムベルゲルが東インドで何をしていたのかについては、「履歴」には日本、シャム、トンキン（東京）への旅という形で触れられており、彼の船はおそらく長崎へも行っていることになる。(二〇) 葬儀に際してヨーハン・ゴットロープ・プァァイフェルが述べた「謝辞」にはさらにコーチンとモルッカ諸島が挙げられている。(二一) ながい年月の間にシャムベルゲルは十三度も赤道を通り、二万マイル程の旅をしたことになる。一六五五年九月、彼は無事にオランダに入港し、二、三週間後には十二年ぶりにライプツィヒに戻っている。彼を特に喜ばせたのは母方の祖父がまだ健在だったことだった。(二二)「履歴」にはさらに、彼が東インド商会で「商取引について多くを学び、経験し」、このことで外科医としての技量と同様、「神の特別な恵みを得た」と記している。つまりシャムベルゲルは、私がすでに推測したように、裕福になって帰って来たのである。ライプツィヒの同郷人たちはこの類の「陸上、水上での幸、不幸」についてはさんざん耳にしており、「皆が飽きるほど十分に」知っていたため、神父は葬儀のとき、もう触れたくはなかった。(二三)

弔辞は彼の晩年に焦点を移す。シャムベルゲルは最後の二年間は「体中が衰弱している」と嘆いてはいたが、それでもまだ「礼

拝には習慣に従って出かけ、彼の年齢での唯一の娯楽、とりわけ彼自身でしつらえた庭園で、夏も冬も時間を過ごす」ことができた。(二五) この庭園はシャムベルゲル関係の訴状に何度も現われ、一通には略図まで添付してある(図3)。死者の棺のそばでは、「高官や著名人」も訪れたというこの庭園の貴重な、珍しい花が称賛された。(二六) もしかすると日本から持ち帰った種も蒔いていたかも知れない。家の紋章の保護天使(?)の下半分が三本の花になっているのも偶然ではなかろう。

シャムベルゲルが死ぬ数週間前に彼の「昔からの親愛なる友」であったピピング(Pipping)が死に、それを予感するかのように彼はその葬儀で次は自分の番だろうと告げている。彼の臨終についてはゼーリヒマン神父が次のように述べている。

「しかしこの前のイースターの時、枝の主日にはまだ元気で、皆の前に、神にふさわしい客として晩餐会に出席できるほどで、ときどき彼を煩わせていた足の痛風も少し良くなっていたが、イースター三日目の夕食時に突然脳卒中を起こし、水曜日の午前、十時から十一時の間に、それまでよりも強い発作で起こり、右半身が麻痺し、全身の力がなくなった。よく効く薬や強壮剤を使って、この思いがけない発作に、全力で対処したが、一度弱ってしまった体は二度と立ち上がることはできなかった。

そのため、故人は命が尽き、人々に別れを告げて、天へ旅立つ時が近いことを悟り、聖シメオンの時(二七)を辛抱強く待っただけでなく、キリスト教徒の習慣に則り、敬虔な歌と祈りを捧げ、同様に司祭も準備の式を行い、近い親類や教会の友人も皆、できる限り立ち会った。彼らの敬虔で真摯な涙の祈りを神様が温情をもってすぐにお聞き届けになり、故人は二日経たないうちに、長患いと臨終の床でこのように用意万端ととのえられ、ほとんど痛みもなく、救世主の到来を待ちながら、ついに前の木曜日、夜八時四十五分、見守る人たちの敬虔な祈りと歌の中、安らかにこの世の生を終えた。彼は、神から類まれな恵みを得て、その命の日数はモーゼの定める期限を超え(二八)、歳は八十三に五ヵ月を残すだけだった。(二九)」

盛大な葬儀の後、しばらくすると膨大な遺産をめぐる争いが始まり、続いてまもなく長男ヨーハン・クリスティアン(Johann Christian)が一七〇六年八月四日に死に、争いはさらに激しさを加えた。ライプツィヒの公文書館の文書には様々な「彼の庭園、家屋の譲渡に対する異議」(三〇)が一七〇六年から一七五〇年にかけて申し立てられている。

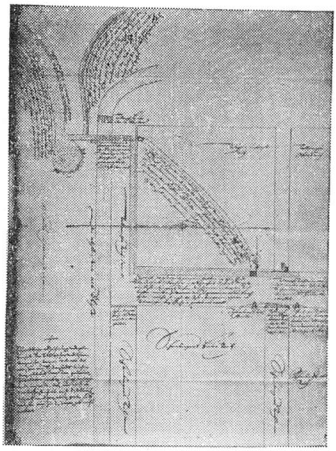


図3 ライプツィヒ郊外のシャムベルゲルの庭園(30)

文　献

Johann von der Behr (1969): Reise nach Java, Vorder-Indien, Persien und Ceylon 1641–1650. In: Reisebeschreibungen von deutschen Beamten und Kriegsleuten im Dienst der Niederländischen West- und Ost-Indischen Kompagnien 1602–1797. Herausgegeben von S. P. L. Honoré Naber. Band 4 Den. Haag 1930.

Daghregister des Comptoire Nangasacuqij zedert 9. December Ao 1648 tot 5e November Ao 1649 en 1650. (Het Algemeen Den Rijksarchief, Haag)

Daghregister des Comptoirs Nangasacquij zedert 5e November Ao 1649 tot 25e October Ao 1650. (Het Algemeen Rijksarchief, Den Haag)

Wolfgang Michel (1990a): Caspar Schambergers "Lebens=Lauff" 『言語文化論究』第一号、福岡、一九九〇年、四十一—五十一頁。

Wolfgang Michel (1990b): 出島蘭館医カスパル・シャムベルゲルの生涯について。『日本医史学雑誌』第三十六巻第三号、二〇一—二一〇頁。

Dirk Schoute: De geneeskunde in den dienst der Oost-Indische Compagnie in Nederlandsch-Indië. Amsterdam 1929.

Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel: Katalog der fürstlich Stolberg-Stolbergschen Leichenpredigten-Sammlung Bd. 1–4. Leipzig: Degener 1927–1935. シャムベルゲルの弔辞資料の登録番号は一九八〇三である。

注　釈

(一) Michel (1990a), (1990b)

(二) Stolberg-stolberg の弔辞集一九八〇三号。

(三) (Michel (1990a).

(四) 弔辞、六八六九頁。

(五) Christian Gottlieb Jöcher: Allgemeines Gelehrten=Lexicon 1750 (復刻版 Hildesheim 1961)

(六) 主成分の辰砂と勺薬末に少量の紛末状のエメラルド、イラジカのひづめ、人間の頭蓋骨、赤サンゴ、鹿角、真珠、琥珀を加える。

(七) 弔辞、七〇頁。

(八) 弔辞、六九頁。

(九) Michel (1990b), 二〇五頁。

(一〇) 弔辞、七〇頁。

(一一) J. R. Bruijin, F. S. Gaastra, I. Schöffer: Dutch-Asiatic Shipping in the 17th and 18th Centuries. The Hague 1979. Vol. II, p. 90–92; W. Ph. Coolhaas (ed.): Generale Missiven.'s Gravenhage 1964. Deel II, p. 234.

(一二) 弔辞、七一頁。

(一三) Behr, 四六—五〇頁。

(一四) Behr. 五一頁。

(二五) 弔辞、七一頁。
(二六) Behr, 七〇頁。
(二七) 弔辞、七一頁。
(二八) 弔辞、七一、七二頁。

"Als er nun hierauff den 23sten Augusti Ordre bekommen, mit der großen Ost=Indianischen Gesandtschafft nach der Insul Formosa, ingleichen den Königreichen China, Japan, und endlich gar nach Jedso, nebst andern Orthen, abzureisen, hat er nicht allein solcher Ordre gehorsamst nachgelebet, und sich alsobald zu Schiffe begeben, sondern auch als er an letzt=gedachten Orte von vier Japanischen Medicis seiner Profession wegen examinirt, und seiner Chirurgischen Wissenschafft probat erfunden worden, die hohe Gnade erhalten, daß er wegen seiner Kunst und Operationum Chirurgicarum von dem Japanischen Käyserlichen Hofe selbsten, auch andern grossen Herren und vornehmen Standes=Personen, in manchen ereigneten Fällen zu rathe gezogen, auch wegen vieler glücklicher Curen mit hohen Privilegiis und Freyheiten, so wohl vor seine Person selbst, als die sämtliche Ost=Indianische Compagnie begnadiget, und endlich gar daselbst eine Zeitlang zu verbleiben genöthiget worden. Und wiewohl er auff sein inständiges suchen, endlich wiederum die Dimission und zu seiner vorigen Europaeischen Compagnie zurücke zu kehren, Erlaubniß erhalten, ward er doch das andere Jahr darauff mit dem neuen Ober=Haupt wiederum an den Japanischen Käyserl. Hof auffs neue beruffen."

(二九) Dagregister 一六四九年十一月七日。
(三〇) 弔辞、七二頁。
(三一) 弔辞、「謝辞」、頁数記載なし。
(三二) 弔辞、七三頁。
(三三) 弔辞、七六—七七頁。
(三四) 弔辞、七七頁。
(三五) 弔辞、ヨーハン・ゴットロープ・ブファイファーの「謝辞」、頁数記載なし。
(三六) 弔辞、付記。
(三七) ルカの福音書(二、二十五〜三十二)によれば、エルサレムに信仰深いシメオンという名の人がいた。この人は聖霊により、「主のつかわす救い主に合うまでは死ぬことはない」と告げられていた。その後、彼は幼子イエスに出会い、その子を腕に抱いて言った。「いまこそ私を安らかに去らせて下さいます、私の目が今あなたの救いを見たのですから」。
「Simeonsstündlein」とは救い主との出会いと、それに続く安らかな死を意味するものと思われる。
(三八) ここで言っているのは「モーゼの祈り」(詩篇九十篇)のことで、そこには「われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。われわれのよわいは七十年にすぎません。あるいは

健やかであっても八十年でしょう。」とある。

(二九) 弔辞、七七―七九頁。

(三〇) Leipzig 市議会文書 II. Sektion S Nr. 721.

(九州大学言語文化部)